

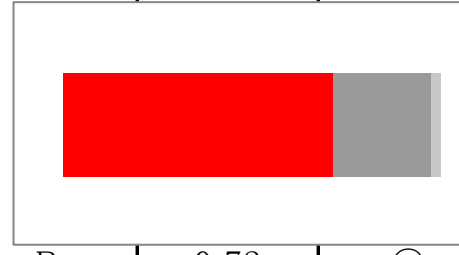


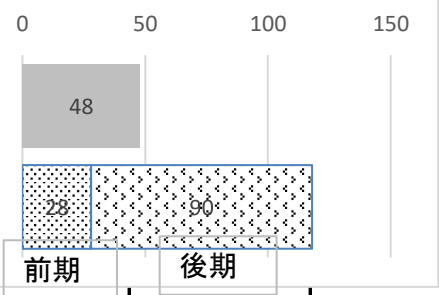
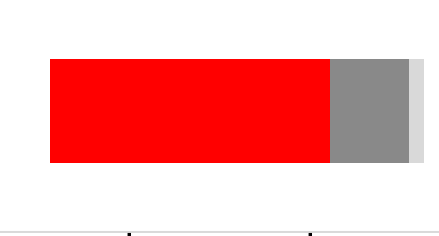


令和4年度 最終評価集計表

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準						分析と今後の課題
				判断基準	判定基準	達成目標	判定	達成比率	○△	
1 授業実践力の向上	① 児童生徒の育成すべき資質・能力を育むために、授業づくりのポイントを明確にし、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりに取り組む。	研究研修課 全学部	【成果指標】(教員) 単元や題材を見通して主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくりのポイントを押さえ、授業実践している。	担当する授業において、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりの3つのポイントをすべて意識した単元構成、授業実践を行った教員の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B		0.87	○	全体の約9割の教員が、授業づくりの3つのポイントすべて意識して授業づくりに取り組んだと回答し、前期から大きく比率が伸びている。これは、後期の全学部の取り組みとして授業づくり検討会を行い、単元構想や模擬授業による授業検討を積み重ねる過程で、個々の教員が3つのポイントを踏まえた授業づくりの意識を高めたからだと考えられる。今後、育成すべき資質・能力を小学部から高等部、社会へのつながりという視点で捉え、社会で生かせる主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、効果的な授業づくり検討会の在り方を検討していく必要がある。
	② 児童生徒が授業の目標を達成できるように、1人1台タブレット端末を有効に活用する。	教務課 全学部	【満足度指標】(保護者) 個別または集団学習において、1人1台タブレット端末を有効活用し、授業改善を行っている。	授業参観や学級通信などで、児童生徒がタブレット端末を有効活用している様子を知り、授業に満足している保護者の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B		0.83	○	本校のタブレット端末を使った授業に満足またはとても満足している保護者の割合は、前期に引き続き83%と高い結果となっている。また、アンケートによると、タブレット端末を使った授業の様子を見聞きしたことがある保護者も増えており、その様子から児童生徒の学習の成果につながっていると感じている記述もあった。タブレット端末の使用はまだ2年目であるが、今後も児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、より良い授業づくりを目指していきたい。
2 小から高までのつながりのある教育活動の推進	① 小学部から高等部、社会へのつながりを意識した教育活動を計画し、実践する。	各課 全学部	【成果指標】(教員) 他学部参観や全校縦割りの教科部会で、他学部について知り、つながりを意識した教育活動を計画し、実践している。	小学部から高等部、社会へのつながりを意識した教育活動を計画し、授業を行った教員の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B		0.72	○	小学部から高等部、社会へのつながりを意識した教育活動を計画し、授業を行った教員の割合は、中間評価から20ポイント向上し、約7割となった。他学部参観をしたいが余裕がなく、教科部会等で教員同士のつながりは感じられるが児童生徒の学部間につながりができたらよい等の意見があった。今後の課題として、縦割りの研究会などつながるシステムを充実すること、コロナ禍でできなかった学部を越えた児童生徒の活動の場を設けていくことなどを考えていく必要がある。
	② 本校のキャリア教育全体計画に示したキャリア発達の視点を取り入れた授業実践を行う。	キャリア教育推進委員会 全学部	【成果指標】(保護者) 各学部のキャリア発達の視点を取り入れた実践を行い、保護者に情報発信し理解をすすめる。	HPや学級通信などで、各学部のキャリア発達の視点を取り入れた教育活動について、理解した保護者の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B		0.67	△	各学部のキャリア発達の視点を取り入れた教育活動について「よく理解した」「理解した」と回答した保護者の割合は67%と、前期よりも12%増えた。保護者懇談の折に、担任が「いしかわ版キャリア教育全体計画」を提示して直接説明を行った学級もあり、保護者の理解につながったと思われる。他にも「キャリア教育通信」や「学年だより」等で児童生徒の取り組みの様子を写真入りで発信したり、連絡帳にキャリア教育の紹介欄を設けた学部や学級があった。しかし、達成目標の70%には届かなかったため、今後も引き続き説明や発信を継続していく必要がある。

3 インクルーシブ教育の実現	①	地域の関係者と連携をとりながら、インクルーシブ教育に関する教育活動を計画し、実践を行う。	インクルーシブ推進委員会 全学部	【成果指標】(教員) インクルーシブ教育に関する教育活動を計画し、実践を行う。	インクルーシブ教育の理念を意識し、工夫、改善した教育活動を計画し、実践した教員の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B		0.59	△	インクルーシブ教育の理念を理解し、教育活動を工夫実践したと回答した教員の割合は59%で、D評価であった。工夫改善できた内容としては、学校間交流や地域調べ等の学習活動、部活動などでねらいをより明確にして実施したものが多かった。工夫改善できなかったと回答した教員は、担当する授業や業務の中では設定が難しかったこと、感染症対策のため例年通りの活動ができなかったことなどを理由としている。他校との合同授業や地域貢献活動など、次年度取り組みそうなアイデアも挙げていることから、校内での共通理解を図りながら今後も継続して取り組んでいきたい。
	②	本校が行ったインクルーシブ教育に関する取組をホームページ等で情報発信する。	インクルーシブ推進委員会 全学部	【成果指標】 インクルーシブ教育に関する教育活動を実践し、積極的に情報発信していく。	インクルーシブ教育に関する教育活動の情報発信を行った回数	A 60 以上 B 48 以上 C 36 以上 D 36 未満	B		118回	○	ホームページや学年だよりなどでインクルーシブ教育について発信した回数は全体で118回と、中間評価を大きく上回る結果であった。9月以降に他校との交流活動や行事が多く計画されていたこと、中間評価の結果を受けて積極的に発信しようという意識が高まったことなどが要因と考えられる。また、ホームページ上には「インクルーシブ教育」のアイコンを設定し、記事にリンクしやすくする工夫を行った。しかし、学部によって回数には大きな差があること、インクルーシブ教育を意識した教育実践がD評価であることから、インクルーシブ教育についての理解をすすめるような取組を、継続して行う必要がある。
4 働き方改革の推進	①	ICT化による効率的な業務改善に取り組み、校務分掌等の業務内容の平準化を進める。	全学部	【満足度指標】(教員) 校務分掌等の更なる平準化と効率化を推進し、計画的かつ効率的な業務遂行をする。	自らの働き方改革に対する取り組み目標を設定し、実践した結果、平準化と効率化が図られたと感じる教員の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B		0.75	○	中間評価より7ポイント向上したものの、1/4の教員は業務の平準化効率化が難しいとしている。ICT活用や自らのタイムマネジメントで業務の効率化を図っている教員が多いが、平準化については組織として取り組む必要がある。業務のマニュアル化と引継ぎを確実にすること、みんなで仕事をしていくという意識を持ち互いに声を掛け合う関係作りをすることが大切である。また、業務内容を見直し、精選し、スリム化していくという取り組みを学校全体で継続していく必要がある。
	②	超過勤務時間45時間以内の教員が100%となることをめざし、働き方改革をすすめる。	各課、各学部	【成果指標】 超過勤務時間45時間以内をめざし、課、部の業務の平準化と効率化を推進する。	各課、各学部の課題に応じ、業務の平準化と効率化を工夫した課・部の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B		0.94	○	TeamsやForms、OneDriveなどを使用して情報を共有し、業務の効率化を図ることができたという意見が多かった。また、ベテランと若手、経験者と未経験者がアドバイスしたりわからないことを聞いたりしやすい雰囲気づくりや、お互い配慮し合える、関係づくりが大切との答えが複数あった。業務内容の見直しやIT活用と同時に、人材育成やお互いを思いやれる雰囲気作りが働き方改革には必要である。